

氏名	前田 直見
授与した学位	博士
専攻分野の名称	医学
学位授与番号	博 甲第 6231 号
学位授与の日付	2020 年 9 月 25 日
学位授与の要件	医歯薬学総合研究科 病態制御科学専攻 (学位規則第 4 条第 1 項該当)
学位論文題目	Skeletal muscle loss in the postoperative acute phase after esophageal cancer surgery as a new prognostic factor (食道癌術後急性期の筋肉量減少は予後予測因子となり得る)
論文審査委員	教授 岡田裕之 教授 尾崎敏文 教授 千田益生

学位論文内容の要旨

筋肉量減少は悪性腫瘍患者における予後予測因子として認識されている。術後の筋肉量減少と予後については、術後 1 ヶ月以降の筋肉量減少に関するものがほとんどであり、術後急性期（1 週間以内）の筋肉量変化に関する報告は少ない。

本研究で我々は、術後 2-3 日目の CT 検査を用いて、術前後の腸腰筋筋肉量を評価し、①食道癌根治術の術後急性期の筋肉量変化、②術後急性期の筋肉量減少が長期予後に与える影響について検証した。

2010 年 1 月から 2015 年 6 月までに食道癌根治術を施行した全症例について後方視的に検討し、適格となった 72 例について、CT 画像を用いて第 3 腰椎レベルの Total psoas major muscle mass index (TPI) を測定した。

81.9%の症例で TPI は減少していた。TPI 減少は、出血量少量の症例や、胸腔鏡手術例で軽度であった。TPI 減少率の中央値をカットオフ値として、重度減少群と軽度減少群に分けたところ、軽度減少群で有意に長期予後良好であった ($p=0.0128$)。

これらの結果から、術後急性期に筋肉量は減少しており、その減少率は食道癌根治術後の長期予後の予測因子となり得ると考えられた。

論文審査結果の要旨

本研究は食道癌術後急性期における筋肉量変化について検討した後方視的臨床研究である。対象は食道癌根治手術症例 72 例、術後 2-3 日目の CT 検査から術前後の腸腰筋筋肉量を評価して①筋肉量変化におよぼす因子、②筋肉量減少の長期予後におよぼす影響について検証した。全症例の 81.9%で筋肉量は減少しており、出血量少量例、腹腔鏡手術例で減少は軽度であり、軽度減少群は高度減少群に比べ長期予後が良好であることが示された。術直後の異化亢進と廃用が筋肉量減少に関わり、その回復遅延が予後に影響していると考察されており、術前・術直後からの栄養、リハビリテーション等、チーム医療による多方面からのサポートの重要性が示唆された。腸腰筋量の測定においては術直後の浮腫が筋肉量値に影響することもあり、さらなる検討が必要であるが、これまで術後早期の筋肉量の変化についての検討は報告がなく、新規性があり、消化器癌手術のなかでも侵襲性の強い食道癌根治術における術直後の病態解明と予後向上の方策に繋がる有用な価値ある研究である。

よって、本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。